

ひろしま

歴史回廊

第12部・近世の自然と暮らし ⑤

これまで見てきたところ、沿岸部や島々では人間活動が活発化し、江戸後期には多くの動物たちが姿を消すほどであったらしい。

では、動物たちのすみかでもある林野の状況はどうであったのか。いったい山々にはどのような樹木がどれほど存在していたのであろうか。江戸時代の林野の姿を具体的に知る方法として、まずは村絵図を取り上げてみたい。

ここに掲げたのは、文化十二(一八一五)年の奥海田村絵図(現・海田町東海田地区)の一部である(上が南)。唐谷川が流れ下り、途中で三迫川を合わせ、下方右端で瀬野川に合流する。

■樹木のない広い山

これを見ると、緑色に塗られた所には松らしい樹木がびっしり書き込まれ、黄土色に塗られた所にはまばらに松が

肥料や用材 用途多彩

林野の姿

描かれている。しかし、その奥の灰色に塗られた広い山々には樹木の表現がほとんどない。また神社の森には松とは異なる樹木も描かれている。

この村にはもう一枚、林野の種類や名前が記された絵図があり、その情報を加えると次のように整理できる。

■伐採禁止の区域も

緑色は藩によって伐採を禁じられた御建山や御留山で、多くの松がある。黄土色は村人個別所持の腰林で、持ち主の利用に依じてまばらな松林がある。最も広い面積の灰色は村共有の野山で、ほとんど樹木がない。

当時の林野は、田畑の肥料や牛馬の飼料、日常の燃料や用材、さらには都市や塩田へ燃料を販売するなど、多くの用途があった。「昔は自然が豊かであった」という理解は、基本的には正しい。しかし、目の前に見える林野の姿はおそらく逆であり、この絵図はそれを示している。

とはいえ、今では右の山々も盛んに樹木が茂っている。広大な柴草山というのはわかには信じ難い気もする。た

またま残された絵図に頼るだけでなく、ほかに江戸時代の林野の姿を知る方法も考えてみたい。

(広島大教授・佐竹昭)

土曜日に掲載します



奥海田村絵図の部分(「海田町史」資料編付録絵図)